

# 日本は BPA の科学に耳を傾けたに違いない

BY STEVEN HENTGES, PH.D 2017 年 1 月 9 日 IN INDUSTRY, POLICY

10 年以上前にビスフェノール A(BPA)は日本で注目を集める話題でした。しかし近頃では、それほど話題になっていません。ヒト健康に携わっている日本の省庁は諸外国の BPA に関する科学的発展について依然情報収集していますが、緊急を要するとか、規制措置が必要であるという状況ではありません。同様に日本の消費者やメディアは BPA にほとんど関心を示さないか、或いは全くないといった状況です。

(BPA への関心がほとんどない)日本と BPA への関心が今もなお続いていて、時には非常に強い関心がみられるその他の国々との相違とは一体何なのでしょう。もしかすると日本政府や日本人は BPA の科学に耳を傾けてきたのでしょうか？

最近、日本の環境省(MOE)が発表した「[日本人における化学物質のばく露量について](#)」というタイトルのレポートに 1 つの手がかりがあります。環境省は過去 5 年間、日本人における様々な化学物質の暴露量を測定する調査を行ってきました。最新の報告書では 2011 年から 2015 年までの 5 年間の結果をまとめています。

BPA 暴露は尿サンプルの分析によって測定されており、この手法が[最も信頼性の高い方法](#)と考えられています。その一番の理由は、BPA は暴露後、生物学的不活性代謝物となって尿に排泄され、[体内から素早く排出される](#)ためです。基本的に代謝物は尿中に濃縮されるので、検出が容易になり、感度の高い分析方法として確立されています。

BPA の尿バイオモニタリングによる結果は、驚くほど低い結果が得られています。実際、この 5 年以上に亘り BPA の中央値は最近科学論文で発表された BPA に対する「[バイオモニタリング等価](#)」(BE)の 1/3,000 以下でした。BE は BPA の保守的な安全摂取限量を基にカナダ保健省の研究者等が計算したもので、実際の摂取が安全許容量を超えるのか、或いは下回るのかを即座に評価するための基準を示しています。BPA の場合には、実際の摂取量は基準をかなり下回り、十分に安全基準の範囲内です。

BPA 暴露が極めて低いと証明されてきたのは日本だけではありません。例えば、米疾病対策センター(CDC)が行った一連の[バイオモニタリング研究](#)では、米国住民が低暴露である事を証明しましたし、フランスでの妊婦に関する[最近の研究](#)でも同様の結果が得られています。

バイオモニタリング研究結果は、我々がいつ化学物質への暴露をいつ懸念すべきか、懸念すべきでないのかを理解するのに重要です。またバイオモニタリング研究結果はいつ公共政策の転換が必要とされるのか、必要とされないかを決定する際にも役立ちます。これら 2 つの理由から科学に耳を傾けることは重要な意味を持ち、日本人は BPA の事となるとしっかりと耳を傾けてきたのだと思われます。